

運動発達査定における動感志向分析の意義

佐藤 徹

Toru Sato: The significance of analysis of motor intentionality in evaluation of motor development in children. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 59: 67-82, June, 2014

Abstract : The most important activity for sport teaching or instruction is to grasp the level of motor development of the learners.

Accepted current evaluation methods are quantitative and involve measurement of sports performance such as running speed, jumping or throwing distance. Qualitative morphological observation of the movement process is currently another accepted evaluation method.

However these evaluation methods are only based on the features perceptible by the observer. Therefore the consciousness process of a moving person is not included in the evaluative process. Such methods excluding the consciousness process are totally insufficient for comprehension of being behavior.

The purpose of this study was to examine the insufficiency of traditional evaluation methods of motor development and to emphasize the need for analysis of motor intentionality. This concept is based on the theory of the “phenomenal body” formulated by the French philosopher Merleau-Ponty.

For example, in a study, it was noted that kindergarten children who were instructed to perform a broad jump for distance were unable to adequately perform the skill. They tended not to jump from the takeoff line drawn on the ground, but to jump aiming at the line.

This unaccountable behavior is not due to intellectual immaturity. The reason for this lack of ability can be understood in terms of the “abstract movement” proposed by Merleau-Ponty. This means movements that are not directed at any actual situation, such as moving the arms or legs upon a command or pointing at something with a finger, whereas concrete movements necessary for life are habitual, i.e. they are directly connected with the actual situation, such as grasping or touching etc.

Merleau-Ponty (2012) stated “The distinction between abstract movement and concrete movement is thereby clarified: the background of concrete movement is the given world, the background of abstract movement is, on the contrary, constructed.” Taken in the light of this theory, it is reasonable to conclude that children are unable to perform the requested action due to a lack of ability for construction of possible space or virtual space, into which they project their own intended movement.

This consequence can never be obtained through measurement or observation methods. We must therefore focus our evaluation not only on skillfulness but also the intentionality of a moving person.

Key words : abstract movement, symbolic behavior, kinesthetic crisis

キーワード : 抽象的運動, シンボル行動, 動感転機

I. 緒 言

子どもの運動発達を的確に把握することは、体育教師が運動指導を考えるうえで最初の、そしてきわめて重要な活動である。

ある運動の発達度を査定しようとする場合、もっとも一般的な方法は、跳んだり投げたりした距離、あるいは一定の距離を移動するのに要した時間の計測などの達成記録に基づく量的基準法である。また、それだけでは体格差や身体成長度に即した運動発達の査定には不十分であるため、行わ

れた運動経過の特徴に基づく質的査定が行われる。

これらの査定法によって、年代間や年齢、地域などと運動発達に関連を比較したり、個人の経年的な運動発達特性を調査したりするなど、さまざまな特性を把握することができる。そのため、これまでも運動発達に関して、測定値による量的視点、ならびに動きの質的視点からの研究は数多く行われてきた。また、それをもとにして子どもの運動活動の必要性などさまざまな問題性も提起され、体育授業やスポーツ指導に有用な情報を提供してきた。

しかし、量的研究にしても質的研究にしても、これらはいずれも行われた運動を対象として客観的な立場から考察したものである。換言すれば、行っている人間、子どもがどのように当該の運動あるいはその状況と対峙しているかという動感志向的内実を考察に含めた運動発達論に関する研究は見つけるのが難しい。

本研究の目的は、第一に、動きを外部視点のみからとらえる従来の研究手法では、とりわけ子どもや初心者運動発達度の査定に関しては不十分であることを論証し、とくにメルロ＝ポンティの現象身体論^{注1)}を拠り所にした現象学的動感志向分析の方法を取り入れることの意義を例証することにある。

第二に、動感志向性の観点から運動発達をとらえようとした場合には、連続的变化のなかに何らかの人為的な区切りを入れて発達段階を査定するのではなく、運動者の動感志向性における「転機」(ヴァイツゼッカー, 1975, p. 299)の発生にもとづく発達段階の査定が不可欠であることを典型事例の考察を通して例証し、これにもとづいて指導者に求められる転機分析力の重要性を論証する。それによって、これまで見逃されてきた動感志向的発達論の実践性が確立される。

II. 運動の外部観察的特性による発達査定の問題性と志向分析の意義

1. 量的評価の問題性

跳んだ距離や投げた距離、一定距離を走った時

の所要タイム、あるいは縄跳びなどの反復動作を一定の時間内に行った回数などを測定し、その値をいくつかのレベルに分類し、そこにあてはめて評価する量的評価法は、運動発達度査定においてきわめて一般的な評価法である。いうまでもなく、この方法は、誰が評価しても同じ基準で査定することが可能であり、客観性という点において有利な方法である。また、多くの子どもたちの標準を設定することができ、それをもとに達成記録を比較すれば容易に運動発達度を知ることができる。

その一方で、数値としての達成記録を子どもの運動発達査定の指標とした場合には大きな問題性を指摘することができる。それは記録の大きな分散性である。安定した運動経過を示すことができない子どもの場合、一回ごとに測定値は大きな変動を示すことが少なくない。そのため数回の試技を通して、その平均値をとったり、数回のうちのよい方の記録あるいは最高値をもって当該者の運動達成力とみなしたりすることが多い。

しかし、ある程度の安定性をもった実施の測定値の平均を取ることの妥当性には納得できるとしても、変動幅が非常に大きい場合には平均値の信憑性は大きく低下する。なかには記録できない試技も珍しいことではない。たとえば、投げたボールが前に飛ばずに、横方向やときには後ろに投げ出されるようなことも幼児ではしばしば見られる現象である。あえてこの試技の記録をとればマイナスの値となる。このような記録までも含めて平均値を取ることの不合理さはいうまでもない。この問題は、年少児や運動初心者の場合にはとくに考慮されるべき問題である。

2. 運動経過評価の問題性

数値は数量を表す抽象的記号であるので、先に述べた量的評価における測定値(記録)は測定した項目以外の内容を捨象したものである。つまり、達成した距離や時間を測ることは、そこで行われた動きの内容を考えないことでもある。別言すれば、運動がどう行われたのかは問わないということである。それでは実用に役立つ発達査定と

はならないので、行われた動きの特徴から運動発達を査定する方法も一般的である。これには二通りの評価法がある。ひとつは関節角度や身体各部の速度などを測定して、その数値から判断するバイオメカニクスの方法である。そしてもうひとつは運動モルフォロジー(形態学)的比較法である。

1) バイオメカニクス的方法

バイオメカニクス的方法は、人体の各部の位置移動に関する物理的特性を探る方法であるため、測定による数値情報の取得を目的とする。行われた運動の物理的变化に関する事実確認であるので結果の客観的提示が可能であるが、測定項目が対象とする運動の特性を的確に表しているかどうかの検証が重要である。複数項目の測定が行われるのが一般的であるが、項目数を増やすことが動きの全体的特性の正確な把握につながるとは限らない。たとえ測定項目をどれほど増やしたとしても、それらは測定が可能な内容に限定されるからである。部分の総合が全体へ還元可能かどうかという問題はつねに残される。

中谷(1975)によれば、自然科学とは「自然現象の中から、科学が取り扱いうる面だけを抜き出して、その面に当てはめるべき学問である」ので、対象は測定可能なものに限られる。近年では人体の複雑な動きも三次元測定法の開発もあり、かなり正確な測定が可能となってきた。しかし、どれほど正確に測定できたとしても、それは物体変化としての特性のみに限定される。つまり、その運動を行っている人間の意図、感情、過去の経験に関する記憶などは含まれない。たとえば、球技などにおけるオープンスキルの発達は相手との駆け引きが本質であり、それを機械的に測ることは不可能である。駆け引きは、自分の技能のみならず、相手の戦術力や戦況などあらゆる要因が組み込まれて機能するものであり、これらを単一の、あるいはいくつかの項目だけに焦点化して測定し、その結果から全体像をとらえようとしても到底把握しきれものではない。このような測ることができない内容が運動発達に大きな意義を持っていることも少なくない。

2) モルフォロジー(形態学)的方法

マイネル(1981, p. 107)は、行われた運動の「空時・力動構造、運動の流動、運動の弾性など、一般に分析的研究が避けてしまう運動の徴表や固有性」をとらえる認識法として運動モルフォロジーを提唱した。モルフォロジーは「対象の全貌と本質を把握する認識作用としては悟性的に思惟に優越し高次の(多くの場合最高の)認識能力」(林ほか編, 1971, p. 949)である「直観」(Anschauung)を通して、運動を分断するのではなく全体的特性を把握する方法である。そのため、指導実践においては日常的に活用され、また研究においても今日ひろく取り入れられている。

見ることを頼りとした素朴ともいえる動きの形の認識法であることから、モルフォロジーを精密科学的な分析研究の前段階ととらえてはならない。高橋(1982)は次のように述べて、モルフォロジーによる形の理解の独自性を説明している。「生物とは生命現象であると同時に、形である。形を忘れた生物学は、大切なものを見落としているといわなければならない。しかも形は、近代科学が依拠している定量的・分析的な方法によってはほとんどとらえることができない。形を計量することによって得られるものは、もはや形ではないのである。形を把握するものは、むしろ直観にはかならない。」

この場合、「形」といっても静止した物体の、いわば死んだ形を対象とするのではない。モルフォロジーの祖とされるゲーテは次のように述べている。「形態学というものを紹介しようとするならば、形態について語ることは許されない。やむをえずこの言葉を用いる場合があっても、それは、理念とか概念を、あるいは経験において一瞬間だけ固定されたものをさすときに限ったことである」(高橋, 1980)。したがって、運動特性の提示にはキネグラムの連続図や静止画・写真などが利用されることが多いが、これが無作為に選ばれた一瞬、たとえば一定の時間間隔ごとの静止画などと同じ意味にとらえられてはならない。

ベルクソンによれば、運動は「絶対的な時間現象であり、時間におけるそのあり方を少しでも

変えたら、例えば一瞬でも運動体を止めたりしたら、運動の様相が変わってしまう」(中島, 1968) という性格のものであり、本来は運動を図や写真で表すことはできない。それにもかかわらず、われわれは一枚の絵や写真だけでも、その時間的前後の動きの様相を想像的に構成することができ、動きの意味をつかむことができる。このような能力、つまり実際の運動経過や図、写真などを見て、そこに実施者の動感も感じ取る感性的能力を土台としてはじめてモルフォロジーは機能する。

しかしそこには一定の能力の獲得という難題がある。つまり、「動感形態は動感化能力をもたない人には見えない」(金子, 2009, p. 99) のであり、マイネル (1998) は、そのような感性的能力は後天的に獲得されるものであるから計画的に教育する必要があるという。

運動観察における動感化能力は、運動の外的経過だけを入念に眺めていれば自然に身につくものというのではない。金子 (2009, p. 106) によれば、身体移入原理に裏づけられた、「自我身体の動感志向性を投射しながら他者の動感世界に潜入していく形態学特有の観察法」としての他者観察の専門能力を身につけることが求められる。それによって、運動モルフォロジーは目に見える運動経過の観察だけでなく、次章以降で取り上げられる志向分析も含んだ全体的考察法として、生命ある人間の運動発達を理解するうえで不可欠の研究法として位置づけられる。

3. 動感志向分析導入の意義

これまでの論述から、運動発達の内実に関して、達成記録や運動経過の量的測定および運動の外部視点からの観察だけでは十全な把握には至らないことが明らかとなった。それらの研究法では、実施している人間の意識が考察に含まれていないからである。リハビリテーションの視点から運動発達論を論じた人見 (2013) は、「発達のような形成のさなかにある者は、そこで何が起きているかさえ内的にはわからず、逆に外から観察しただけでは本人の経験に届かない」という。また、「観察できる外的事実を放棄したのでは、発

達は何であるか、発達がどの方向に進んでいるのかということについての手がかりさえ失ってしまう(観察のパラドクス)」と述べている。したがって、運動発達の査定においても、外的観察に加えて、それだけでは把握できない内的過程、意識体験を探る方法が必要となる。本論では、その方法として現象学的視点からの志向性 (Intentionalität) の分析を取り上げる。

現象学の祖フッサールは、「意識はすべて『なにもものかについての意識』 *Bewusstsein von etwas* であるという意識の基本的性格を『志向性』という概念で捉え、これを主題的に問い深めることによって、認識作用の主観性と認識内容の客観性を橋渡そうとした」(木田, 1970, p. 31) といわれる。そして、「志向的体験の分析をもって現象学の中心問題とした」(林ほか編, 1971, p. 573) のである。

この志向性にはあらゆる意識現象が含まれる。われわれは生きている限り、「表象、判断、感情、意志、欲求、その他いかなる性質の志向作用もすべて、それぞれの仕方では何らかの対象に向かっており、そして通常その対象はそのつどの志向的体験の中で〈目標として狙われ〉思念されている」(木田ほか編, 1994, p. 178)。運動実施においても、行おうとする意図や、動きながら行う自分の動きの修正、あるいはすでに行った動きについての反省など、多様な形式の意識活動をともなって運動に立ち向かっている。さらに、本論で対象とする志向性はこのような明確な意識現象だけにとどまらず、われわれが何かあるものに対峙しているときの無意識的態度や状況なども含めた広い意味でとらえるものである。したがってヴァルデンフェルス (2004) が、現象学用語の志向性 (Intentionalität) は「私がある特定の意図をもって、特定の行動を意図的に行うことを意味するものではありません」と注意を喚起しているように、英語の *intention* (意図) という狭い範囲の語と同義にとらえてはならない。

われわれがものごとに立ち向かっているときには、知覚してはっきりと意識できる内容と、無意識のうちに自ずと了解している内容がある。フッ

サール (1997) は、前者のような明確な意識対象に関わるものを「能動的志向性」、後者のようなはっきりとした意識にはのぼらないが主体の意識や行動に影響を与える志向性を「受動的志向性」と呼んでいる。

なお、ここでいう「受動」という語は、「能動」に対置する語として用いられており、一般に使用される意味の「受け身」を表しているのではない。このことは、これまで現象学研究者においても誤解されてきた問題であり、十分に注意する必要があると山口 (2005) が指摘している。稲垣 (2007) は、「フッサールにとっての『無意識 (Unbewusstsein)』とは、『意識が無い (bewusstlos)』というよりは、『自我が無い (ichlos)』もしくは『自我が機能していない』、『自我が気づくことのない』ということの意味している」と説明している。たとえば、不意に飛来してきたボールをとっさにうまくキャッチしたときなど、自分がそのように動こうと意識することなく身体が勝手に動き、事後になってはじめて自分の動きを意識することがある。その場合、キャッチの瞬間は自らの意図にもとづいて行ったという明確な意識は働いていない。

運動を行う際にも、はっきりと意識にのぼる能動的志向性だけでわれわれの運動を理解し尽くすことはできない。むしろその能動性を浮き立たせる地平としての受動的志向性が重要な意義をもっている。フッサール (2004, p. 91) は、志向的分析の「本来的な仕事は、意識の顕在性のうちに含まれている潜在性を露呈することである」と述べている。

金子 (2007, p. 412) は、運動を行う際にもなっている明確な顕在的意識の背景にたたま込まれて潜在化した志向体験の意味核を「含意潜在態」と呼んで、その分析が身体知の構造の解明に不可欠であることを一連の著作 (2002, 2005a, 2005b, 2007) の随所で指摘している。

本論も、運動発達の進んだわれわれ大人が普段気づかずにうまく行っている運動の背景にある潜在態を取り出し、志向的意味内実を目に見えるようにすることを目的としている。それによって子

どもの運動発達の本質的意味が理解されるようになる。

ここで、運動発達査定に関してなぜ動感志向性の分析が必要なのか、その必要性を投動作の研究事例について検討してみたい。

これまで投動作の発達に関しては多くの研究が発表されている。たとえば、宮丸 (1980) は幼児の投動作を映画分析法によって研究し、動作の質的パターンの分類とともに、投てき距離・初速度・投射角・リリース位置の測定値の経年的変化を詳細に提示している。この種の研究の先駆ともいえるもので、学術的価値が高い研究である。

宮丸は調査結果のひとつとして、加齢とともに投射角度が高くなっていくことを報告している。この傾向は他の研究でも報告されており、小学生の投動作について調査した小林ら (2012) も「投射高は4, 6年生が2年生よりも有意に大きかった」と述べている。

幼児にボールを投げさせると、前下方に投げつけるような動作を行う者が多いことから、低年齢では投射角が低く、年齢が上がるとともに高くなっていくという傾向には納得できると思われる。しかし、この傾向は測定データによって事実として提示されているだけで、その理由を論証しているものはない。

身体の成長、筋力の増強によって、腕を振る速度も増大するので、投げ出されたボールの初速度も高まり、その結果、投距離も長くなるのは当然である。それに対してこの投射角の変化は、そのような連続的向上を遂げる性格のものではなく、実施者の志向性における大きな転換点からとらえるべき特徴なのである。幼児でも指示すれば真上に投げることさえ可能であることから、この投射角度が高くなっていく現象は成長や筋力の向上では説明がつかない。つまり、この現象の意味は従来の外的観察や量的測定によっては把握できないものである。どのような志向的転換点をとらえるべきかについては次章以降で明らかにされる。

発達の進んだ、いわば運動の完成形と未習得者の運動を外面的に比較するだけでは発達の本質の様相に切り込むことはできない。子どものことば

の発達過程の研究でも同様の問題があり、浜田(1999)は、「できあがってしまった完態の姿を念頭に、ひたすらそこにまでいたる過程をなぞって発達段階を説くという種類の発達心理学が世を席捲している」と批判している。また山口(2011)も、人間の諸能力の発達を問う発達心理学の近年の傾向として、外部観察の対象が個体的主観から問主観の主観へ移行するに伴って被験者の体験を学問的知見に組み込もうとしてはいるが、それに応じたしっかりした方法論が欠けているためにこれまでの外部観察に対する単なる補足にしかになっていないと述べて、外部観察的研究の困難性を指摘している。

それゆえ、われわれ大人にとっては自明なものであり、取り立てて意識することのない部分に疑問の目を向けなければ、現象の本質の意味を理解することはできない。そこで、「自覚的意識とは独立に、気づいたときにはすでに成立している(もしくは解体・変容している)世界とのかかわり方の解明の技法」(稲垣, 2012)である現象学の手法が必要となる。

Ⅲ. 動感志向分析にもとづく 運動発達の理解

1. 抽象的空間の構成力の発達

1) 走り幅跳びの運動発達に関する事例的考察
もし、「小さな子ども、たとえば幼稚園児は走り幅跳びができない」という説を唱えられたら異論が噴出するであろう。走るのもおぼつかないほどの低年齢の子どもの場合なら領けるとしても、実際に幼稚園で走ったり跳んだりしている子どもたちの姿を見れば、できないという見方は誤りであると判断するか、あるいは走り幅跳びという運動課題の意味を子どもたちが十分に理解していなかったのではないかという疑念が湧いてもおかしくはない。もちろん、どれだけ跳べるかという達成力はここでは問題とされていない。あくまでもできるかできないかという問題である。

しかし、確かに多くの幼稚園児は走り幅跳びができないのである。同様に遠投(できるだけ遠く

まで物体を投げる動作)もできない。もちろん、できる子どももいるが、ここではできない子どもの存在を措定することが重要である。

実はこの問題は幼稚園児だけに該当するのではない。小学生や、ときには中学生であっても走り幅跳びができない児童や生徒が少なからずいる。スポーツテストを行うと、助走して行って、踏み切り板から前上方に跳び出すのではなく、助走の延長、あるいは少し大またになる程度の走り方で砂場に駆け抜ける生徒がいる。このような動作に対して、運動感覚の鈍さを嘆いたり、生徒のやる気を疑い、ときには怒り出したりする教師も少なくない。

鉄棒の逆上がりや跳び箱が跳べない生徒に対して怒り出す教師はいない。それは、最初は誰でもできない段階があること、練習を積む必要があること、できるようになるまでの過程には個人差があることなどを経験的に知っているからである。では、なぜ走り幅跳びはそのように扱われないのだろうか。それは、走る動作と跳ぶ動作、およびその組み合わせができることと遠跳(できるだけ遠くまで跳ぶという課題をもった運動であり、遠投に合わせて本論ではこのように呼ぶ)としての走り幅跳びの違いが教師に理解できないからである。つまり、走る動作と跳ぶ動作ができれば誰でも走り幅跳びはできるはずだという認識に疑問を持つことは一般にはないのである。しかし、遠跳としての走り幅跳びができるようになるためには、動感志向性における大きな変化が必要なのである。そのことを次の事例が示している。

事例：幼児の走り幅跳び(遠跳)

ある幼稚園で4歳の園児たち30数名に走り幅跳びを行わせた。事前に課題の内容をていねいに説明し、助走して踏み切り線のところからできるだけ遠くまで跳ぶように指示した。また、跳び方を数回示範した。

園児の中には、大人が行うように、助走から踏み切り線の近くに足を置いて前上方に跳び上がるという普通の走り幅跳びを行う者もいたが、多くの子どもたちは、踏み切り線の

はるか手前で踏み切って、着地を線の近く（多くは線を少し越えたあたり）で行っていた。つまり多くの子どもたちは、線から遠くに跳ぼうとするのではなく、線を跳び越すことを目標にしているかのように思われた。そのため、跳躍距離は非常に短く、幼児の運動資質に比して適格な測定値が得られるとはまったく考えられなかった。

踏み切り線から跳ぶ者が少なかったため、跳躍距離の測定は妥当性がないと考え、踏み切り線から1.5メートル幅となるようなもう一本の線を引いて川に見立て、その川を跳び越えるように指示した。その結果、ほとんどの子は踏み切り線のあたりで踏み切り、川の向こう側まで跳ぼうとしていた。ただし、遠くの線まで達することができない者は全力での跳躍の意図が見られたが、線まで容易に達することができる者にとってはその線までの距離は最大遠跳距離ではない。したがって後者の場合には遠跳という課題の達成とはいえない場合もある。

2) 園児にとっての「遠跳」の志向的意味

ここで問題とすべきことは、なぜ園児たちは線から遠くに跳ぼうとするのではなく、線を目指して跳んだのか、その志向的内実を探ることである。

われわれ成人は、できるだけ遠くまで跳ぶことを要求されれば、その課題達成のための行動を行うことができる。そのとき、どれだけ跳んだか、その距離の長短が問題となることはあっても、出された課題に対応できるかどうかを取り立てて問題にすることなどない。だから陸上競技の投てきや跳躍種目では、同じ目的に向かって選手たちが技能を競い合い、そのときの能力差が測定値となって現れる。学校体育においても、技能レベルの差はあっても事情は同じであり、運動能力評価として距離測定を行うことに違和感もたれることはあまりない。

しかし、幼稚園児などの子どもは、これらの運動に対してわれわれ成人と同じような態度で立ち向かうことができるとは限らない。「できるだけ

遠くまで」ということばの意味が理解できないのではなく、できるだけ遠くまで跳ぶ、投げるための動き方が分からないのである。メルロ＝ポンティ（1975, p. 191）は、主体に対して運動の発動を働きかけるものを「運動的意味」（signification motrice, motorische Bedeutung）^{注2)}と呼んでいる。幼児たちはこの運動的意味が分からないのである。あるいはわれわれが求める幅跳びとは別種の運動的意味が子どもたちに働いているともいえる。

その理由を考察するとき、メルロ＝ポンティの「抽象的運動」と「具体的運動」の志向的相違への洞察が拠り所を与えてくれる。

3) 具体的運動と抽象的運動

メルロ＝ポンティ（1975, pp. 179）は、戦争で頭部に傷害を負った患者シュナイダーの症例に関するゴルトシュタインらの研究をもとに、「掴む」ことと「指示する」ことの違いを説明している。

われわれは、自分の鼻を「掴む」と「指さす」という行為の間には、接触があるかないか程度の違いしか感じない。鼻を掴む直前の指の位置は、指さす行為の指の位置と同じような場所にあることから、物理的にみればわずかな差しかないと考えるのが普通である。しかし、脳の一部に機能障害を負った患者の症例は、これらの動作の本質的相違を如実に示す。この患者は、目を閉じていても自分の鼻を掴むことはわけなくできるが、鼻を指さすようにいわれてもできないという。

「鼻を掴む」動作は、「そもそもの始めからその終局に魔術的に達してしまっており、その目的を予料してしかことを始めない」（メルロ＝ポンティ、1975, p. 81）ような「具体的運動」である。換言すれば、終わりの状態まで含めて行為全体が身体的に了解されていて、どのように動くのか思念する必要のないような動作である。われわれの日常生活のなかでは、対象物に向かって歩いたり、いすに座ったり、ドアを開けたりするなど、無数の具体的運動をとおしてさまざまな行為が進められている。これらの運動では、自分の動作と対象とが完璧に結びついている。塚本（2008）

によれば、ある運動に熟達することは、身体が「特定の『できる』において現象的に消滅すること」である。そのときは、「身体がいわば忘れて存在」になっていて、ある行為、たとえば飛んできたボールをキャッチしようと思うだけで十分であり、自分の身体の動きに意識を向けるようではミスを招くことになる。

それに対して「指し示す」動作は、身体の実在を忘れてできる運動ではない。Buytendijk (1956, S. 192) も、何かを指し示すことは、何かを掴むこととは性格のまったく異なった行為であり、指し示すことができるためには、主体に向き合って安定している空間、つまり、その中で物ごとが特定の距離を保ちながら並列的に、あるいは順序だって存在しているような空間が必要だという。それに対して、掴む場合にはそのような空間は必要なく、たとえば前述の脳に障害を負った患者は、物をうまく掴んでも、その掴んだ物体がどこにあるのか分からないという。

またこの患者は、目を閉じて腕を水平に上げるとか空中に円を描くといった具体的状況から隔離された純粋な身体運動を行うよう指図されても、すぐには応じることができないことが確認されている。メルロ＝ポンティ (1976, p. 179) は、このような「何ら実際状況に向けられていないような運動」を「抽象的運動」と呼んでいる。ここで使われる「抽象的」という語は、行為をその文脈から切り離すことを意味し、「具体的なものから離れて、『可能的』ないし『考えられうる』にすぎないものの領域」(メルロ＝ポンティ, 1976, p. 106) を指している。これに類して、他者の動きのまね動作や、ダンスあるいはスポーツで他者の動きをまねようとするときなども同様の志向性のもとに行われる。

4) 可能的空間への自己投射としての抽象的運動

メルロ＝ポンティ (1975, p. 191) が、「具体的運動の背景はあたえられた世界であり、これに反して、抽象的運動の背景は構成された世界である」と述べているように、抽象的運動ができるためには、それを実現する可能空間を自ら作り出さ

ねばならない。いうまでもなく、その過程は受動性の次元で進行するのであり、その都度明確な意識が伴っているわけではない。

物を掴むときにどのように腕や手を動かすのかがあまり思案することはないと同様、健常者であれば、自分の鼻を指さしたり、単に腕を回したりするときの抽象的運動でも、腕や手の動かし方にとさら注意を向けることはあまりない。しかしそれは、その運動がわれわれにとって慣れた易しい運動である場合に限られ、少し複雑になればどのように動けばよいのか戸惑うことになる。その好例を、金子 (2007, p. 300) は「まぼろしのバー」で説明している。

これは、走り高跳びで一定の高さのバーをクリアすることができる者に対して、バーを取り去って、バーがあるときと同じ動きを行わせるという試みである。金子によれば、バーを取り去っても同じような運動経過を示すことができるのは、その動きのコツの身体中心化が条件となる。つまり、まぼろしのバーを跳び越すことは、実際にはないバーを仮想的に設定して、それに自分の動きを合わせるものが要求される。その場合、メルロ＝ポンティ (1975, p. 192) がいうように、「抽象的運動を可能にする正常な機能は、一つの〈投射〉機能であって、それによって運動主体は、自然的には存在せぬものもそこでは存在のみかけをもつことのできるような一つの自由な空間を、自分のまえに用意する」ことが必要なのである。したがって、バーがあると思われるあたりで、自分はどのように動くのか、潜勢的に運動を行ってみたい者が、バーを取り去られると何を行ってよいのか分からなくなる。

この「まぼろしのバー」は、すでに跳び越すことができる者に対する試みである。しかし、まだ跳んだことがない、どのように跳ぶべきか分からない時点でのバーを置かない走り高跳びであれば、踏み切りの位置関係や空中動作など動きのきっかけをつかむことがいっそう難しい課題となる。今回の幼児たちの場合、いわば最初から「バーのない走り高跳び」に相当する、具体的な目標のない走り幅跳びの動きを求められていたこ

とになる。その意味では、まぼろしのバーの試み以上に難しい課題であったといえるかも知れない。

われわれが走り幅跳びを行うときには、具体的な目標のない空間に向かって、自分の動きを投企しながら跳びだしていくのであり、そのときの跳びだし角度やスピードなどに応じた踏み切りの力動性は身体的に了解されている。金子（2005b, p. 116）が、「匿名的な動感志向性は、動きつつある身体それ自身のなかに居座っていて、その動感運動の自我意識は隠蔽されたままになっている」と述べているように、幅跳びで適切な方向に跳び上がるための手足の動かし方や上体の姿勢の保ち方というような運動の仕方は、特別にその部分に注意しない限りはあまり意識にのぼることはない。できるだけ遠くに跳ぼうと意図するだけで適切な動きを身体が選択してくれる。

しかし、運動経験の貧困が大きな問題となってきた現代の子どもたちにとって、われわれが自明的にスポーツ運動種目ととらえている走り幅跳びはそれほど易しい運動ではない。渡辺・岩田（2006）は、小学生の中・高学年児童にとっても走り幅跳びの「助走-踏み切り」の組み合わせ運動は容易ではなく、助走から踏切のきっかけを得られずにそのまま走り抜けてしまうような傾向の子どもや助走の延長のようなまぎ跳びになり片足の着地になってしまう子ども（両足での着地ができない子ども）が少なくないと述べている。

跳び方に注意を向けなくても、遠くまで跳ぶのにふさわしい動きができてしまうというわれわれの動き方に対する無自覚は、子どもにとって走り幅跳びの運動投企がどれだけ難しいことであるかを理解する妨げとなる。

このような志向的構造をもつ抽象的運動に、前述した幼児の走り幅跳びの動きを置き重ねてみると、子どもたちの奇妙ともいえる動作の意味を理解することができる。つまり、子どもたちは具体的な目標のない走り幅跳びの課題に対して、抽象的運動を構成することができないため、地面に引かれた線を着地の目標にして運動を行っていたのである。

このことは、走り幅跳びの運動習得という視点

から見れば、ヴァイツゼッカー（1994, pp. 108-124）が「迂回路」と呼んだ方法に該当する。ヴァイツゼッカーは、ヒステリー麻痺によって手関節を伸展させる（手首を伸ばす）ことができなくなった患者に対して、手首を伸ばすことを直接要求するのではなく、他人の手や鉛筆などを握らせるといった間接的な課題を与えることによって、本来の目標である手首の伸展を可能にした症例を報告している。これは、単に手首を伸ばすという課題は具体的な目標物への行為ではなく抽象的運動であり、その治療は物を握るという現実的（具体的）な課題を経由（迂回）してはじめて可能となったことを意味している。幼児の走り幅跳びの例も、川跳び越しという迂回路を経験することによって本来の目標である走り幅跳びの動きが導かれたということができる。この事例は、スポーツの指導において、本来の目標のための練習ステップとして適切な「迂回路」を設定することの重要性を示唆している。

2. シンボル（象徴）機能の獲得における志向的転機

前章において、運動経験の少ない子どもにとって抽象的運動が困難であることが例証されたが、人間に特徴的なこの抽象的運動を可能にするのはシンボル（＝象徴：以後、シンボルと象徴は同義として扱う）機能である。本章では、運動発達の査定においてこのシンボル機能の作動を確認することが不可欠であることを論証する。

1) シンボル（象徴）とは

鳩は平和のシンボルというように、シンボル（象徴）は「抽象的な思想・観念・事物などを、具体的な事物によって理解しやすい形で表すこと」（松村ほか編，1995, p. 1321）である。しかし、このようなシンボルマーク的なものだけでなく、シンボルの作用は非常に多様な文化諸般にわたって、いわば無意識的にはたらいっている。哲学事典（林ほか，1971, p. 757）では、「質的にことなる二者がなんらかの類似によって必然的にかかわり合う」ことがシンボル（象徴）の特徴であると説明されている。これは、異なるものと同じ

意味を見出すこと、あるいは同じものを異なる視点から見ることの意味している。カッシーラー(1997, p. 66)が「人間を、『理性的動物』という代わりに、animal symbolicum (シンボルの動物: 象徴的動物)と定義したい」といったように、人間の行動はシンボル(象徴)機能を獲得することによって動物レベルの行動を越える。

本来、鳩と平和のあいだに関連などないように、「シンボルにおいては、その記号が意味する内容を『指し示す』だけであり、空間的にも時間的にも直接的にその対象と関わっているのではない」(齊藤, 2011)。たとえばシンボル機能が現れる典型的なものにことばがあるが、ことば(音声)とそれで表されるものとの間には本来何の関係もない。あるのは意味のつながりだけである。音声と直接的関係を持つのはオウムが喋ることばである。オウムはそのことばで意味を表しているのではない。だからオウムは別の語で言い換えたり、同じことばで他のものを示したりすることはできない。一方、人間は、同一物をさまざまな語で言い表すこともあるし、同一語でまったく別の意味をもたせたりすることができる。このような「パースペクティブの多様化」(メルロ＝ポンティ, 1976, p. 184)がシンボルの機能である。これによって人間は、動物にはない多彩な思考、行動が可能となっている。

2) 行動のシンボルの形態

メルロ＝ポンティは、著『行動の構造』(1976, p. 161-184)のなかで生物の行動形態を癒合的形態・可換的形態・象徴的形態の三種に分類している。もっとも低次の行動として「癒合的形態(formes syncrétiques)」があり、これは下等動物に見られるような生存と密着した本能的行動形態である。その上位に「可換的形態(amovibles)」が位置する。原(仏)語のamovibleとは「取り外しが可能な、交換可能な」という意味である。またドイツ語に訳したWaldenfelsは「はぎ取る、交代する」ことを意味するablösbarという語を充てている(Merleau-Ponty, 1976)。これは、学習が可能ということの意味し、オウムのことばや棒を使う猿の行動など動物が新たに覚えた行動形

態である。そして人間固有のものとして「象徴形態(formes symboliques)」を挙げている^{注3)}。

動物は、たとえ新たな行動を学習しても、それは状況と密着していて、別のところで類似の行動をとることはない。猿が芋を塩水で洗うことを覚えたとしても、それに倣って他の状況でも食物を洗って食べるようにはならない。動物の行動を引き起こす記号は信号であり、信号は反応と常に一対一の関係である。それに対して人間にとっての記号は、ポイテンディク(1971, p. 207)がいうように、「経験のうちに形成された関係によってではなく、記号と他の記号との結びつきが記号をもって表された事物と他の事物との結びつきに等しいがゆえに、記号をもって表された事物を現前せしめるような記号なのである。」他の動物の場合には、ある記号は対象(物)との直接的関係としての信号(シグナル)として機能するが、人間の場合には意味だけを関連づけた象徴へと上昇する。それが「象徴的形態」といわれる所以である。

この行動のシンボル形態は人間に固有のものであり、動物のように事物と一対一の関係のなかでうまく行動できる「可換的形態」を凌駕するものである。といっても、人間のすべての行動が象徴的形態で進められているわけではない。メルロ＝ポンティ(1976, p. 161)は、この三つのカテゴリーは動物の三つの群に相応しているわけではなく、「その行動が癒合的レベルを越えないとか、シンボル形態の下位へ下ったりすることはない」というような動物の種は存在しない」と述べている。つまり、人間であっても状況^{注4)}に応じて適切な行動をとることができず決まり切った動作しかできないのであれば、動物の可換的形態と同じレベルにあるといえる。

シンボルは記号で表される対象と意味的に統一されているのであり、両者の関係性が理解されている。関係が同じであれば、それを実現するには多様な方法を考えることができる。だから人間は、一見まったく異なるような行動の間にも類似の関係を見出すことができるのである。たとえば、机の下に落ちた鉛筆を取るとき、手を伸ばすのか、手が届かないので棒を使うのか、あるいは

足で引き寄せるのかなど、どの方法が好都合か思索することができる。

メルロ＝ポンティ（1976, p. 184）は、「〈意味するもの〉と〈意味されるもの〉、〈志向〉と〈その目指すもの〉との充実な合致へ向かう行為は、象徴的形態とともに現れる」という。また、「ここでは行動はもはや単に一つの意味を〈もつ〉のではなく、行動そのものが〈意味〉なので〈ある〉」と述べている。足で机の下の鉛筆を取るという判断行動がシンボルのはたらきによると考えることは一般にはあまりないが、メルロ＝ポンティに依れば、それが多様な可能性の中から選ばれた一つの決断という意味で、その行動自体が「意味」なのだといえることができる。

3) スポーツにおけるシンボル行動

カッシーラー（1997, p. 68）が人間は「シンボルを操る動物」だと言ったように、人間の行動はシンボル機能の特徴としている。しかし、われわれはそのことを常に意識しているわけではない。無意識のうちにシンボリック思考、あるいはシンボリック行動を行っている。たとえば、地図を見ているときには、実際の地形を見ているのではなく、頭の中で仮想空間を作り上げている。このような働きもシンボル機能を持っている人間だからできる活動である。動物は、たとえ渡り鳥が遠大な距離を往復する能力を持っていたとしても、それは本能にすり込まれているだけであって、われわれが地図を見ながら移動するのは本質的に異なる活動である。このいわばあたりまえの活動としてのシンボル化の働きをここであえてスポーツ、あるいは体育の問題として取り上げるには、その意義が確認されなければならない。

スポーツ、たとえばサッカーゲームにおいて、どの経路を通して特定の位置に移動するのがよいかという戦術行動はシンボル化能力のはたらきが直接パフォーマンスに影響する典型的な例である。サッカーやラグビーなどの球技においては、ゲーム状況を上空から見ているような感覚を習得することが重要だと言われている。この場合、「自分の外に座標軸の設定された空間」としての「シンボル空間」（河本、2006）の中でゲームが

仮想的に展開されることが必要である。このようなシンボル化の能力が戦術力、状況判断力の土台となっており、この能力の養成は球技コーチングにおけるもっとも重要な課題のひとつである。

イチロー選手が守備で見せる魔術的ともいえる頭脳的プレーを見て、高度なシンボル化能力の持ち主であることに異論を挟む者はいないであろう。しかし、このようなシンボル化能力の萌芽は子どもの動きのなかにも随所に観察することができる。

子どもの鬼ごっこにおいて、ただ単純に追いかけたり逃げたりする初期の段階から、経験に応じて相手の動きに合わせてフェイントを行ったり待ち伏せ的な行動を取ったりできるようなレベルに発達する。これは、他者のキネステーズ（動感能力）、すなわち能力性をそなえた「私の身体性の中に息づいている〈動いている感じ〉」（金子、2005a, p. 24）に即してこれから行われるであろう行動を予描し、同時に自分のキネステーズをもとに潜勢的に運動を投企する能力が獲得されたことを意味している。つまり、シンボル化能力の獲得、すなわち視点の交換が可能となった、あるいはその能力が向上したのである。ゲーレン（1985）はポイテンディクに同調して、この潜勢運動（virtuelle Bewegung）が子どもの集団的遊技や大人のスポーツ活動においてきわめて大きな役割を果たしていることを指摘している。

また、バスケットボールのシュート（小さな子どもでは同様の現象が運動会の玉入れで観察される）で、初めはゴールリングを直接狙った直線的なボール軌跡であったものから、放物線を描いたシュートに変わっていくのは、単純な物理的变化や力加減によるものではない。自分の力で投げたボールが、ゴールとの間で描く放物線の軌道を想定することができるようになったからである。もちろんこの想定は、たいていの場合、無意識的に、いわゆる受動性の次元で進められる。つまりこの場合、ゴールまでの距離、ボールの投げ出し角度、ボールの初速（投げる力）、軌道の想定などが自分のキネステーズとの相関の中で身体的に了解されているのである。

このように、スポーツパフォーマンスにとってシンボル化能力はきわめて大きな意義があり、運動の自由習得ならびに体系的学習活動の中でこの能力を発展させることが重要である。しかし、現実のコーチング活動において、このシンボル化能力の発展を阻害するような指導が少なくない。つまり、固定的行動形態の反復練習、いわゆるドリル練習のみを強いる指導である。状況に応じて臨機応変に行動できることがゲームプレーの真髄であるはずが、自らの行動の意味さえ分からずに紋切り型のプレーしかできず、指導者に言われたことだけを繰り返す応用力のない選手を作り出している現状がある。このような問題は、「ほんとうの人間のシンボルは、同一性によってではなく、可変性によって特徴づけられている」というカッシーラー（1997, p. 85）の本質を突いた言葉の意味からはずれた、運動発達におけるシンボル化能力の発生によってもたらされる運動発達の動感志向的転機に対する認識の欠如に起因するものである。

Ⅳ. 指導者に求められる転機分析力

これまでの論述から、運動指導におけるシンボル化能力の査定の意味が確認された。しかし、それを客観的に測るための装置や基準を示す指標があるわけではない。ゲーム観察において、ある選手が状況の意味を読んだうえで特定の位置に移動したのか、それとも偶然その地点に到達したのかを物理的移動の視点から区別することは不可能である。また、玉入れでかごを直接ねらって投げた子どもが放物線軌道を予測してかごから少し離れた空間へボールを投げ出すようになる発達は、前述した遠投の投射角度の変化の例と同様に、確かに投射角度の物理的变化としてとらえることはできても、この変化がなぜ起きたのかを説明することはできない。

したがって、物的に特定することができないシンボル化能力を把握するためには、物体を扱う方法とは異なる認識の方法が必要となる。その方法として拠り所となるのは「転機」という概念であ

る。これは、ヴァイツゼッカーが著『ゲシュタルトクライス』（1975）の中で、因果系列からは説明のつかない生物学的事象としての行為の統一性を叙述するために用いた概念である。

ヴァイツゼッカー（1975, p. 299）のいう転機とは、「一挙に別のものとして別の世界に自己を見出すところの自我」があらわれる転回点であり、消滅と生成の同時的展開である。木村（1988）によれば、有機体と環境との出会いのなかで主体性が成立し、その関係が維持されるためには出会いの根拠となっている主体の原理が無意識にそれ自身を変化させ、古い原理が捨てられて新しい原理が獲得されることによってのみ可能になるという。このような変化の節目がヴァイツゼッカーの意味での転機である。転機を感じ取って、その前後の変化を比較する区別の仕方は、物理的連続性のなかに何らかの人為的区切りを入れて分類する仕方とは根本的に異なる区別の仕方である。

たとえば競歩という競技においては、選手の両足が地面から離れた瞬間があるかどうかで歩と走の動作が区別される。しかし、これは人為的に設定した区切り方に過ぎない。われわれは自分が歩いている状態から走り出したとき、その違いを空中局面の存在で判断するのではない。ジョギングで疲労困憊になって、空中局面のない足を引きずるような走り方になっていても、そこから歩く動作に変えるとその違いは明瞭に分かる。走と歩を物理的特性だけで正確に区別しようとしても、必ずそれぞれの中間的な特性が表れてうまくいかない。しかし、走っているのか歩いているのかを実施している本人が間違えることはあり得ない。それを見ている他者も、その転機の瞬間は把握が可能である。

しかし、転機を見抜くことがいつも容易であるとは限らない。自転車に乗れるようになったり、鉄棒で逆上がりができるようになったりすれば、そのとき大きな運動発達があったことは本人も周囲の者も間違いなく分かる。しかし、それはその運動ができたという結果からの判断であり、実施者の動感における転機を捉えたものとはいえない

い。動感志向性における転機、いわゆる「動感志向的転機」を見抜くことは誰にでもできることではない。そこには一定の能力が要求される。

子どもが立位から前屈して、両脚の間から後ろを見ている姿勢、いわゆる股覗きから、体重が前にかかってたまたま前に転がってでんぐり返りのようになったとする。このときわれわれは、この子はでんぐり返り（前回り）になったとは言っても、それができたとは言わない。運動は、偶然に一回だけ動きの型にはまったことをもってできるようになったとはいえず、ある程度の再現性をもった運動経過が必要だからである。いわゆる Straus (1956) のいう「環境に適合するための内的組織化としての動き方 (Bewegungsweise)」の習得が問題となる。

しかし、この偶然の成功をきっかけにして、同じ動作を試み、同じような結果を繰り返すうちに、その子はまた次も同じようにできることを確信するようになる。そのとき、その子にはでんぐり返りの動感が発生したのであり、その動感発生を感じ取った周りの大人もこの子はできるようになったとみなすようになる。

この場合、最初いでんぐり返りになった時と数回後のでんぐり返りを行ったときとの間に、外的経過においてはほとんど変化がなくても、その子はコツをつかんだのであり、動感発生という大転機が訪れていたはずである。それを感じ取ったときに、端から見ているわれわれもその子が前転をできるようになったとみなすのである。その際、試みの回数によって判断するのではない。たとえ一回だけの観察であっても、見慣れた者なら「たまたまそうなった」のか「できるという確信のうえで行った」のかの判定はそれほど難しいことではない。しかし、運動指導という視点を意識していない一般の者であれば、動感志向的転機を正確に見取ることは難しい。

シンボル化能力の発達を見抜くためにはさらに鋭敏な観察眼が必要となる。子どもの鬼ごっこにしろ、サッカーなどのボールゲームにしろ、情況判断力が向上する過程は因果的に説明できるものではない。コーチをしていれば、「あの選手は周

りの状況をよく見られるようになってきた」と感じるときは誰にでもあることだが、それを客観的に証明する手立てなどないことは明白である。

Buytendijk (1958, S. 186) がいうように、「いつシンボル行動、つまり精神的、真に人間の行為が現れたのかを正確に記録することは不可能」である。それゆえ、指導者には動感の発生を転機としてとらえるための発生運動学の意味の観察能力 (金子, 2005b, pp. 168-191) を形成する努力が求められる。

V. 結 語

わが子がいつ歩けるようになったか、いつ自転車に乗れるようになったのか大抵の親は答えられるが、豆のような小さな物を親指と人差し指でつまめるようになったのはいつからなのか答えられる親はほとんどいない。というより、その変化に発達上の大きな意味があることに気がつくことがない。しかし、手のひらで握って取り上げるのは乳児の頃からできるが、指だけでつまむ動作に移行するのは大きな運動発達なのである。

Buytendijk (1958, S. 186) によると、つまむ動作というのは慎重さ (Umsichtigkeit) が特徴的に現れるしぐさでありカテゴリー的行動 (kategoriales Verhalten) である。つまり、物に対して無防備な態度で臨む乳児にはこのような動作は現れない。持ち上げた後の事態を考えるようになってはじめて現れる行動である。視点を変えて情況の意味を想定するシンボル行動といってもよい。だからこのような動作は猿にはできない。猿の場合は、たとえば火のついたたばこを手持たせ、徐々に根元まで燃えて熱くなってくると2本の指でつまむ動作が現れてくるという。猿でも現実と密着した行動としてなら可能なのである。

この例から考えるべきことは、運動発達は具体的な運動経過のなかに新しい動きのかたち、つまり運動ゲシュタルト (Bewegungsgestalt) として現れるが、それを発生させる情況との関連および主体の内的過程を探ることなしには発達の意味をとらえることはできないということである。つ

まり、外から確認できる物理的变化だけをどれほど正確に把握しても、その運動を実施している主体の志向性の分析を欠いていたのでは真の発達を把握することはできないといえる。機械のメカニズムを明らかにするような方法では、生命ある人間の行為の発生のしくみをとらえることはできない。

一般の両親がわが子の運動発達に対してそのような志向性の分析を施す必要などない。しかし、教師やコーチなど運動を指導する立場の者にとっては、志向性の分析が不可欠であることはいうまでもない。猿と幼児とでは同じつまむ動作が現れても、その志向の意味はまったく異なるように、スポーツ場面でもたとえ外形的に同じような運動経過が現れたとしてもその志向の内実は多様であり、そこに洞察の目を向けない限り運動発達の本質の意味をとらえたものとはいえない。

本論では、第一に、幼児の走り幅跳び（遠跳）を考察事例にあげて、この運動の発達過程においては単に走と跳の組み合わせの習熟だけに観点を置くのではなく、抽象的空間の構成能力が形成されているかどうかの動感志向的分析が不可欠であることを例証した。鷺田（2003）は、われわれが生きている具体的な空間は組織され方位づけられた空間であり、それが経験や行為の『素地』をなしていると言う。それに対して抽象的運動が要求されるときには、「そのような経験や行為の『素地』としての空間の上に、諸物をそのなかにおさめる一つの客観的な空間を重ね描きして、そのなかで自分の身体の位置や角度を確定しなければならぬ」と述べている。このような観点に立つと、われわれ指導者は初心者に対して、実施が難しい抽象的運動を求めていることの多さに気づく。具体的運動材に支えられた地盤、つまり鷺田のいう「素地」が形成されていない学習者に対して抽象的運動を課題とする指導は、とくに運動経験の少ない初心者や年少の子どもの場合には慎重に考えるべきであり、学習初期には具体的な目標を設定して投げたり跳んだりする経験を積ませる練習過程が不可欠であるという指導原理が導出される。

第二に、ボールゲームなどの情況判断などにおいて重要な役割を果たすシンボル化能力の発達の査定法としてヴァイツゼッカーの意味の転機概念を取り入れることの意義について考察した。これは、シンボル化能力の査定だけでなく、動感志向的観点から運動発達をとらえる場合に不可欠の方法である。しかしこの転機分析能力は誰にも等しく開かれているものではなく、自身の運動経験や指導経験などを土台として自ら高めていく努力を要求される専門能力としての身体知である。

運動発達の査定は、それが何らかのかたちで運動指導に結びつくことが重要である。意味体系と価値体系に関わりながら達成として実現される人間の行為（ポイテンディク、1971, pp. 79）に対して、意味や価値を捨象して絶縁的に得られた測定データが直接運動指導につながることはない。今回の事例の走り幅跳びの例でいえば、跳んだ距離の測定だけから幼児の志向構造を読み取ることは不可能で、前述した「迂回路」のような方法論的発想は出てこない。指導につながる発達査定法を確立していくためには、機械の性能検査的な方法ではなく、人間の生命ある行為を動感論的視点から志向性を分析していく研究が必要である。

付記

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号：24500690）の助成を受けて行われたものの一部である。

注

注1) メルロ＝ポンティが『知覚の現象学Ⅰ』（1975, pp. 125-255）のなかで、対象の身体との対比で説明している身体のあり方である。

われわれが身体について語るときには二つの側面から可能である。ひとつは、身長や体重、血液循環などで表される物的状態や健康状態、あるいは筋力などの運動能力など、測定や診断などの対象としての身体である。メルロ＝ポンティはこのような身体のあり方を「客観的身体」あるいは「対象的身体」と呼んでいる。

もうひとつは、それを生きている自分の身体である。これは、手足の位置は無意識的に分かって

いるし、目の前の溝は自分に跳べる幅なのか、二本の木の間は身体を斜めにしなくても通り抜け可能なのかなどもいちいち測って確かめなくても分かっているような身体であり、これを「現象的身体」と呼んでいる。

前者は、誰にでも確実なかたちで認識できる、いわば経験の図にあたるものであり、その意味で「客観的・对象的」である。一方後者は、われわれのすべての行為において普通は気づかれないで機能している経験の地である。

このような現象身体のある方について貫(2008)は、『身体図式 (Schème corporel)』によって構造化され、『習慣的身体』というあり方をもち、また『運動意味』が状況との回路となる」と説明している。

注2) メルロ＝ポンティの「運動的意味」について貫は、「身体図式を起動したり、組み換えたり、形成したりするもの」(2008, p. 132)と説明している。たとえば、突然ボールが自分に向かって飛来してきたとする。その場合、サッカー選手であればとっさに足を出してトラップする。多少敏捷な者は身をかわして避ける。ボール遊びの経験が少ない者は縮こまるだけで避けることもできないかもしれない。このようにわが身に降りかかる状況に対して、自分の身体図式によって行われる反応動作は多様である。つまり、同じひとつのボールでも動きを引き出す運動的意味はさまざまであるといえる。事例であげた幅跳びの場合、踏切線だけの場合と、川に見立てた二本線の場合では幼児にとって運動的意味がまったく異なっていたとみるべきである。このように「運動意味を媒介として状況と身体図式はひとつの〈状況—身体—系〉を作る」(貫, 2008, p. 134)のである。

注3) ボイテンディクやメルロ＝ポンティなどの時代にはシンボルの行動は完全に人間固有の行動形態だと考えられていたが、近年のチンパンジーの行動研究などから分かるように、人間以外の動物にもシンボル(象徴)形態に類する行動がまったく出現しないというわけではない。菅野は次のように述べている。「霊長類研究は目覚ましい進展を見せてきた。霊長類はメルロが考えたよりずっと高度な知的行動をしている、あるいはすることが可能である。メルロの否定にもかかわらず、霊長類は象徴的形態の水準における行動を行う能力の持ち主である」(メルロ＝ポンティ, 2011, p. 279)。したがって、人間は他の動物に比してシンボル化の機能の発達が著しくすぐれているというべきで

あろう。

注4) 「情況」: ボイテンディク(1971, pp. 30-31)は、「動物の活動の意味は、世界の構造的部分の意味内実との関連においてはじめて開示されるのであって、そのような部分をわれわれは情況と名づける」と述べている。また、「われわれが動物や人間の行動を認識し得るのは、最初から行為を情況に、情況を行為に有意味に関係づけ得る場合に限られる」と行動と情況の一体的関係を説明している。本論では、このように行動と意味的に切り離せない場の関係を、単なる「状況」と区別して「情況」と表現する。

文 献

- Buytendijk, F.J.J. (1956) Allgemeine Theorie der menschlichen Haltung und Bewegung. Springer Verlag: Berlin, S. 192.
- Buytendijk, F.J.J. (1958) Das Menschliche. K.F. Koehler Verlag: Stuttgart.
- ボイテンディク(1971)人間と動物. みすず書房: 東京.
- カッシーラー: 宮城音弥訳(1997)人間. 岩波書店: 東京.
- ゲーレン: 平野具男訳(1985)人間. 法政大学出版局: 東京, p. 214. <Gehlen, A. (2009) Der Mensch 15. Auflage, AULA-Verlag: Wiebelsheim, S. 182.>
- 浜田寿美男(1999)「私」とは何か ことばと身体との出会い. 講談社: 東京, p. 93.
- 林 達夫ほか編(1971)哲学事典. 平凡社: 東京.
- 人見眞理(2012)発達とは何か リハビリの臨床と現象学. 青土社, p. 163.
- フッサール: 山口一郎・田村京子訳(1997)受動的総合の分析. 国文社: 東京.
- フッサール: 浜渦辰二訳(2004)デカルト的省察. 岩波書店: 東京, p. 91.
- 稲垣 諭(2007)衝動の現象学. 知泉書館: 東京, p. 138.
- 稲垣 諭(2012)リハビリテーションの哲学あるいは哲学のリハビリテーション. 春風社: 横浜, p. 102.
- 金子明友(2002)わざの伝承. 明和出版: 東京.
- 金子明友(2005a)身体知の形成(上). 明和出版: 東京.
- 金子明友(2005b)身体知の形成(下). 明和出版: 東京.
- 金子明友(2007)身体知の構造. 明和出版: 東京.
- 金子明友(2009)スポーツ運動学. 明和出版: 東京.

- 河本英夫 (2006) システム現象学. 新曜社: 東京, p. 203.
- 木田 元 (1970) 現象学. 岩波書店: 東京, p. 31.
- 木田 元ほか編 (1994) 現象学事典. 弘文堂: 東京.
- 木村 敏 (1988) あいだ. 弘文堂: 東京, p17.
- 小林育斗・阿江通良・宮崎明世・藤井範久 (2012) 優れた投能力をもつ小学生の投動作の特徴とその標準動作. 体育学研究, 57: 613-629.
- 松村 明ほか編 (1995) 大辞泉. 小学館: 東京.
- マイネル: 金子明友訳 (1981) スポーツ運動学. 大修館書店: 東京. <Meinel, K. (1960) Bewegungslehre. Volk und Wissen Volkseigener Verlag: Berlin.>
- マイネル: 金子明友訳 (1998) 動きの感性学. 大修館書店: 東京, pp. 37.
- メルロ＝ポンティ: 竹内芳郎・小木貞孝訳 (1975) 知覚の現象学 I. みすず書房: 東京.
- メルロ＝ポンティ: 滝浦静雄・木田 元訳 (1976) 行動の構造. みすず書房: 東京.
- メルロ＝ポンティ: 菅野盾樹訳 (2011) 知覚の哲学. 筑摩書房: 東京, p. 279.
- Merleau-Ponty: Waldenfels, B. (1976) Die Struktur des Verhaltens. Walter de Gruyter: Berlin, S. 121.
- Merleau-Ponty (2012) Phenomenology of Perception. Routledge: New York, p. 113.
- 宮丸凱史 (1980) 投げの動作の発達. 体育の科学, 30: 464-471.
- 中島盛夫 (1968) ベルグソンと現代. 塙書房: 東京, p. 22.
- 中谷宇吉郎 (1975) 科学の方法. 岩波書店: 東京, p. 14.
- 貫 成人 (2008) 真理の哲学. 筑摩書房: 東京, p. 119.
- 齊藤 伸 (2011) カッシーラーのシンボル哲学. 知泉書館: 東京, p. 175.
- Straus, E. (1956) Vom Sinn der Sinne. Springer Verlag: Berlin, S. 263.
- 高橋義人 (1980) 形と力ー形態学とは何かー. モルフォロギア, 1, ナカニシヤ出版: 京都, pp. 43-64.
- 高橋義人 (1982) 「見る」ことの哲学. 理想 No. 593, 理想社: 東京, pp. 86-105.
- 塚本明子 (2008) 動く知 フロネーシスー経験にひらかれた実践知ー. ゆみる出版: 東京, p. 173.
- ヴァルデンフェルス: 山口一郎・鷺田清一訳 (2004) 講義・身体の現象学ー身体という自己ー. 知泉書館: 東京, p. 397.
- 鷺田清一 (2003) メルロ＝ポンティ. 講談社: 東京, p. 110.
- 渡辺 誠・岩田 靖 (2006) 小学校体育における跳躍運動の教材づくりとその検討ー特に走り幅跳びにおける「運動組合わせ」の視点からー. 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要「教育実践研究」No. 7: 71-80.
- ヴァイツゼッカー: 木村 敏・浜中淑彦訳 (1975) ゲシュタルトクライス. みすず書房: 東京. <Weizsäcker, v.V. (1968) Der Gestaltkreis 4. Auflage. Gerog Thieme Verlag: Stuttgart.>
- ヴァイツゼッカー: 木村 敏・大原貢訳 (1994) 病因論研究 心身相関の医学. 講談社: 東京.
- 山口一郎 (2005) 存在から生成へーフッサル発生の現象学研究. 知泉書館: 東京, p. 173.
- 山口一郎 (2011) 感覚の記憶. 知泉書館: 東京, p. 158.

(平成25年7月19日受付)
(平成25年11月7日受理)